

論文の要旨

論文題目 日本語歯茎音 /d, n, r/ の混同に関する音声学的研究
台湾の日本語学習者を対象として

氏名 劉 秋燕

学位 博士(文学)

授与年月日 平成 15 年 5 月 16 日

台湾の日本語学習者が日本語を発音・聴取する際、有声・無声閉鎖音の混同以外にダ行・ナ行・ラ行子音の混同が多く見られることは以前から指摘されている。有声音・無声音の混同に関しては多くの研究で取り上げられ、調音的、音響的、知覚的な観点から検討されてきたが、ダ行・ナ行・ラ行子音の混同について問題提起はされているものの、混同原因を検証した研究はほとんど見られない。

日本語のダ行・ナ行・ラ行子音の混同、つまり歯茎音 /d, n, r/ の混同は台湾で使用されている台語と台湾の国語の音声体系及びそれぞれの音の調音的特徴と関係している。本研究の第 1 章では台湾の言語事情を概観し、台湾で使用されている台語と国語の声母の音声体系について述べる。第 2 章ではこれまでの先行研究で指摘された台湾の日本語学習者の発音及び聴取の問題点に関する各研究の成果をまとめるとともに、日本語の全ての音節を網羅した単語リストを用いて台湾の日本語学習者の発音について行った調査結果を示す。第 3 章では歯茎音 /d, n, r/ の混同の実態を明らかにするため、日本語母語話者と台湾の日本語学習者を対象に行った発音と聴取の調査結果について述べる。第 4 章では第 3 章の調査で明らかになった /d/ と /r/ の混同の原因を究明するために行った知覚同定実験の結果を述べる。第 5 章は第 3 章の調査で最も多く混同の見られた /n/ と /r/ の混同原因を探るために行った知覚同定実験の結果である。第 6 章では第 4 章の /d/ と /r/ 及び第 5 章の /n/ と /r/ の知覚同定実験の結果をもとに、学習者が同定に用いる知覚情報と学習者の発音における単音の調音的特徴とはどのような関連性があるかを考察する。

本研究における発音及び聴取の調査においても、杉藤(1996:66)が指摘しているように、母語話者である日本人の間でも /d/ と /r/ の混同が見られることが明らかになった。このような混同、即ち日本語母語話者の発音する弾き音 [ʌ] を閉鎖音 [d] と聞いたり、閉鎖音 [d] を弾き音 [ʌ] と聞いたりする混同は台湾の日本語学習者にも見られる。逆に、学習者の発音する弾き音 [ʌ] は日本語母語話者にとって閉鎖音 [d] に聞こえることが多い。学習者に見られる歯茎音の混同は /d/ と /r/ のみでなく、/n/ と /r/ の間の混同も数多く観察された。/d/ と /r/ の混同は /r/ が弾き音 [ʌ] で調音される場合に起こりやすく、/n/ と /r/

の混同は /r/ が側面音 [l] で調音される場合に起こりやすい。発音と聴取の混同には強い相関関係が見られる。

/d/ と /r/ について学習者の調音的特徴をスペクトログラム及び波形図から観察すると、学習者の発音する閉鎖音 [d] は日本語母語話者に比べ、閉鎖持続時間が長く、破裂の程度も強い。弾き音 [ʌ] についても日本語母語話者より閉鎖持続時間が長く、破裂を伴う。学習者はこのような調音的特徴を持つが、それが聴取とどのように関係するかを検証するため、[d] と [ʌ] の知覚同定実験を行った。実験では閉鎖持続時間、破裂の強弱、破裂区間の有無の三項を知覚の情報として設定した。実験の結果、日本語母語話者は [d] の閉鎖持続時間の長短を主な知覚情報として /d/ と /r/ を同定するのに対して、学習者は破裂区間の有無及び破裂の強弱に影響を受けることが明らかとなった。日本語母語話者と同じ知覚様式による、つまり、学習者にとって閉鎖持続時間を主な知覚の情報とする /d/ と /r/ の知覚は、破裂の強さとともに破裂区間の存在があって初めて可能となるのである。学習者と日本語母語話者の間に生じたこのような知覚情報への依存度の違いは聴取の混同をもたらす原因であり、学習者の [d] と [ʌ] の調音的特徴と大きく関わっていると言える。

一方、/n/ と /r/ の混同については、学習者にとって日本語の弾き音 [ʌ] は習得しにくいいため、/r/ を台語及び台湾の国語の音声体系にある側面音 [l] で調音していることによる。台語では [l] と [n] は相補分布の関係にあり、非鼻音化母音の前には [l] が現れ、[n] は鼻音化母音の前に現れる。条件異音の関係にある [l] と [n] は混同の起こりにくい状況にあるはずであるが、[n] の強い鼻音性及び [n] に後続する母音の強い鼻音化という学習者の調音的特徴が日本語の /n/ と /r/ の聴取に混同を引き起こしていると考えられる。そこで、学習者の [n] と [l] の混同の原因を究明するため、子音の持続時間の伸長・短縮、移行区間の切除、移行区間の置換、鼻音化母音と非鼻音化母音の置換の四種の操作を加えた音声刺激を用いて、日本語母語話者と台湾の日本語学習者を対象に知覚同定実験を行った。

実験の結果、/rV/ から作成した刺激音については、日本語母語話者は母音が何であるかにより、子音の持続部の音声的特徴が主な知覚の情報になる場合もあれば、鼻音化した母音の部分に頼って知覚する場合もあり、どちらの知覚情報も用いているという知覚様式も見られる。一方、学習者はほとんどの場合に子音の持続部の音声的特徴を主な知覚の情報にしていることが明らかとなった。このような結果をもたらした原因は [n] に後続する 5 母音における鼻音化の強さの違いであると考えられる。即ち、母音の鼻音化という知覚情報への依存度は両被験者グループで異なると思われ、母音によって日本語母語話者には異なる知覚様式が見られたのである。これに対して日本語母語話者の発音した母音の鼻音化の強さは学習者にとって鼻音 /n/ の知覚情報たりうる程の鼻音性を持っていないため、これを主な知覚の情報にしていないのである。/nV/ から作成した刺激音については、両被験者グループとも子音に後続する母音の部分を知覚の情報として参考にしながらも、子音の持続部の音声的特徴を主な情報として知覚していることが分かった。/rV/ から作成し

た刺激音に比べ、両被験者グループの知覚様式は近いと考えられるが、/ini/ と /ono/ の場合では、日本語母語話者の方が学習者より子音の持続時間の長短による影響を多く受けている。両被験者グループとも移行区間の切除、移行区間の置換には大きく影響されなかったと結論づけられる。

以上、[d] と [ʌ] の知覚同定結果及び [n] と [l] の知覚同定結果から、学習者の歯茎音 /d, n, r/ の調音的特徴は聴取に影響を与えていることが明らかになった。両被験者グループが知覚に用いる情報への依存度の異なりは聴取に混同を与える主な原因である。聴取と発音の間にある強い相関関係は本研究の二つの知覚実験で証明できたと言える。